

令和 6 年 6 月 13 日現在

機関番号：10104

研究種目：若手研究

研究期間：2021～2023

課題番号：21K13309

研究課題名（和文）入試方法が学生の大学進学行動へ与える影響の分析

研究課題名（英文）Analysis of the Impacts of Admission Methods on Students' University Enrollment Behavior

研究代表者

小野塚 祐紀（Onozuka, Yuki）

小樽商科大学・商学部・准教授

研究者番号：20875067

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,500,000円

研究成果の概要（和文）：日本の大学入試方法は、筆記試験型入試（一般入試）と総合評価型入試（推薦・A0入試）という、実施時期と評価軸で互いに異なる2種類に大別できる。本研究では入試方法と学生の大学進学行動の関係を明らかにするために実証分析を行った。分析の結果、入試方法と学生の間には大学や高校のレベルによって異質性がある可能性が示された。また、効率的かどうかは議論の余地があるものの、筆記試験型入試に加えて総合評価型入試を導入することは、学生母体の質をある程度保ちながら多様性を向上させる手段となっている可能性を示した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

大学入試は、その高い社会的関心度・重要度にも関わらず、経済学での実証的研究は非常に稀であった。本研究は、従来この入試を分析してきた他分野の研究者とは違う観点を提示できたという点で、学術的・社会的に大きな意義があったと考える。特に、入試方法の評価に必要な不可欠なものにも関わらず、筆記試験型入試しかない場合と比較して総合評価型入試方法もあることでどのように学生の進学する大学が変化するのかという視点は今まで社会的にも学術的にも持たれていなかった。また、筆記試験型入試に加えての総合評価型入試の導入・拡大は日本以外の東アジアの国々でも見られている傾向であり、国際的にも意義のある知見を提供できたと考える。

研究成果の概要（英文）：Japanese university admission methods can be broadly classified into two types: written exam-based admissions and holistic admissions, which differ in timing and evaluation criteria. This study conducted empirical analyses to clarify the relations. The results suggested that there could be heterogeneity in the relationship between admission methods and admitted students, depending on the level of the universities and high schools. Furthermore, although it is debatable whether it is efficient, introducing holistic admission in addition to written exam-based admission has been shown to potentially enhance diversity while maintaining a certain level of student quality.

研究分野：経済学

キーワード：大学入試方法 筆記試験型入試 総合評価型入試 実証分析 学生の質と多様性 教育経済学

1. 研究開始当初の背景

入試制度は、学生の選抜（誰が学校に行くのか）と配置（どこの学校に行くのか）を決める役割を持ち、学校や学生・保護者だけではなく、人材育成の観点から社会的にも重要である。日本の大学入試では筆記試験型入試（一般入試）が従来主流であったが、社会で求められる人材の変化に伴って総合評価型入試（推薦・AO入試）が過去数十年で広まり、今では大学進学者の半数近くがこの入試方法で進学している。一般的に総合評価型入試は選抜に関わる費用が高いと考えられているだけでなく、複数の入試方法を維持すること自体が煩雑であることから、総合評価型入試が社会に及ぼす影響は検証されるべきである。

筆記試験型入試と総合評価型入試は、実施時期と評価軸で互いに異なる入試方法であり、また大学や受験生はどの入試方法を用いるかを選択することができる。入試方法を選択できる場合には、学生は、それぞれの入試方法で評価される観察可能な特性だけでなく、自身は観察できるが大学側は観察するのが難しい特性（学校への熱意等）にも基づいて受験校および入試方法の選択を行うことが予想される。大学側もそれぞれの入試方法の受入れ定員割合を変えることで、欲しい学生を確保すると考えられる。したがって、入試方法が一つしかない場合と比較して、大学と学生の組合せ、及び、人材輩出の面でも違いが生じると思われる。しかしながら、日本の大学入試制度の研究は経済学では非常に限られており、また他国の研究では学校や学生が入試方法自体を選択できる場合はほとんど考えられてこなかった。

2. 研究の目的

本研究では日本の大学入試方法、具体的には筆記試験型入試と総合評価型入試を対象とした分析を行い、入試方法が選択可能であることが学生の大学進学行動にどのように影響するのかについて理解を深めることを目的としていた。特に、(1) 学生が利用する大学入試を決定する際の要因、(2) 大学入試方法が学生の大学に進学する・しないの選択に与える影響、の2点に関して実証的な知見を得ることを目指していた。

3. 研究の方法

大きく三つのことを行った。まず一つ目は、大学や高校のレベルによって総合評価型入試の果たしている役割が異なるのかについて示唆を得るための分析である。この分析では、ベネッセコーポレーションがさまざまな大学に通う大学生を対象に実施した、「第1回大学生の学習・生活実態調査」の個票データを借り受け、大学進学度に基づく出身高校ランク別に、筆記試験型入試での進学者と総合評価型入試での進学者の違いをまとめた。

二つ目は、上記の準備的な分析でまとめられた各入試方法の入学者の特徴を基として、実証分析を行う際に参考となる理論的枠組みを構築することである。それぞれの受験生は2種類の能力を持ち、大学は筆記試験型入試ではそのうち1種類を、総合評価型入試では両方の能力を評価対象にするとした。関心のある大学の実際の受験生だけではなく、潜在的な者も含めた受験生全体を考えることで、入試方法の変化に伴う大学と学生の組合せの変化を捉えられるようにした。

三つ目は、入試方法が大学進学行動に与える影響の実証分析である。当初の計画では、高校生を対象に行われた調査の個票データを借り受け、入試方法が高校生の大学に進学する・しないの選択に与える影響を分析する予定であった。しかし、分析の途中で、研究代表者が所属する大学の業務データを研究目的で利用できることが判明した。当初計画していた、大学に進学する・しないの分析はできなくなるが、この業務データの方が質が高いことと、業務データを利用した分析は日本ではまだ少ないことから、このデータを研究に用いる価値が高いと判断した。また、業務データだけでは捉えるのが難しい情報を得るため、業務データと結合可能な形で当大学の学生を対象にアンケート調査を行うこととした。

使用データの変更に伴い、推薦入試の存在が大学が獲得する学生に与える影響を分析することにした。申請時の研究目的からの変更となるが、入試方法と大学進学行動（大学と学生の組合せへの影響）という点においては変わらない。推薦入試は前期一般入試よりも早くに行われるため、実際には推薦入試で入学した学生でも、その一部は推薦入試がなくとも当大学に前期一般入試で入学した可能性がある。当大学では推薦入試の可否結果が出る前に一般入試の出願が締め切られることを利用して、推薦入試が当大学になかった仮想的な場合における、学生の当大学への前期一般入試への出願行動及び可否結果を予測した。そして、その他の業務データとアンケート調査データを用いることで、前期一般入試のみの場合と比較し、当大学は推薦入試があることでどのような学生をどのくらい大学が獲得しているのを分析した。

4. 研究成果

(1) 研究の主な成果

まず、準備的な分析から以下のことがわかった。

出身高校ランクによる、総合評価型入試（推薦・A0入試）の役割の異質性

高位高校出身の総合型入試入学者は、授業で求められたこと以上に勉学に取り組み、学校行事やイベント、社会活動に力をいれている傾向がみられた。また、認知・非認知・対人のすべてのスキルにおいて、大学で伸びたと感じている具合が筆記試験型入試入学者より高かった。つまり、難関大学では、筆記試験では測りづらい面で望ましい特性を持つものを総合評価型入試によって獲得できている可能性がある。また、出身高校ランクに関わらず、総合評価型入試入学者は、同ランク高校出身の筆記試験型入試入学者と比較して、大学の授業にまじめに取り組む傾向が見られ、学業面や態度で劣るという証拠は見られなかった。

次に、大学の業務データとアンケート調査データを用いた分析から以下のことがわかった。

推薦入試なしでは大学が獲得できなかった学生の割合

実際に推薦入試で入学した者のうち約6割が、推薦入試がなかったら違う大学に進学していた。つまり、残りの約4割は、推薦入試がなくとも前期一般入試で当大学に進学していた。

推薦入試があるから獲得できた学生の特徴

推薦入試があるから獲得できた学生は、前期一般入試で獲得できた(であろう)学生とは、性別・出身高校・学力・性格特性等において、いくらかの違いが見られた。彼ら・彼女らの大部分は、当大学に推薦入試がなければ下位の大学に進学したと予想され、入学時点での学力は劣る傾向がある。しかし、推薦入試の枠を全廃して前期一般入試の枠とした場合に獲得できたであろう学生と比較して、入学後の学業に関するパフォーマンスが劣っているわけではなかった。

(2) 得られた成果の国内外に置ける位置づけとインパクト

大学入試は、その高い社会的関心度・重要度にも関わらず、国内において経済学での実証研究は非常に限られていた。本研究で他分野の研究者とは異なる観点を提示できたことは、学術的・社会的に大きな意義があると考えられる。特に、総合評価型入試があることで筆記試験型入試と比較してどのように大学と学生の組合せが変化しているのかという点は、入試方法の評価に必要不可欠であるにも関わらず、今まで社会的にも学術的にも見落とされていた。

本研究は日本のデータを用いた分析だが、筆記試験型入試に加えての総合評価型入試の導入・拡大は日本以外の東アジアの国々でも観察されている傾向であり、本研究により得られた結果をこれらの国々にも応用できると考える。

また、大学進学と将来の賃金等には強い関係があることから、大学入試制度が学生母体の質と多様性に与える影響は、積極的是正措置(アフターマティブアクション)の研究等、近年でも注目されているテーマである。本研究は、この文献に貢献するものとして、学生母体の質をある程度保ちながら多様性を向上できる可能性のある入試制度を示したと言える。

本研究の成果は国内外の学会等で発表をしている。上記の結果をまとめた論文については、査読付き学術雑誌である『日本労働研究雑誌』に掲載された。

(3) 今後の展望

本研究の限界には、

学生のアウトプットが大学での学業に関するものに限られている

大学進学前(高校生時点)での人的投資行動への影響を考慮していない

という点が挙げられる。今後はこれらの点に対して実証的な知見を提供できる研究を行うことを予定している。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 小野塚祐紀	4. 巻 742
2. 論文標題 大学入試方法による学生の違い - 出身高校ランクによる異質性	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 日本労働研究雑誌	6. 最初と最後の頁 91-103
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 小野塚祐紀	4. 巻 756
2. 論文標題 入試方法の変化が人的資本形成へ与える影響 - 多面的な評価尺度を持つ入試方法の部分的な導入	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 日本労働研究雑誌	6. 最初と最後の頁 40-49
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計7件（うち招待講演 3件/うち国際学会 1件）

1. 発表者名 小野塚祐紀
2. 発表標題 大学入試方法による学生の違い - 出身高校ランクによる異質性
3. 学会等名 日本経済学会2021年度春季大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 小野塚祐紀
2. 発表標題 入試方法と学生の大学進学行動
3. 学会等名 小樽商科大学 土曜研究会（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 小野塚祐紀
2. 発表標題 Trade-off of Students Between Exam-Based and Holistic Admissions
3. 学会等名 SWET2023
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 小野塚祐紀
2. 発表標題 Trade-off of Students Between Exam-Based and Holistic Admissions
3. 学会等名 日本経済学会2023年度秋季大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 小野塚祐紀
2. 発表標題 Student Quality and Diversity, and Multiple Types of University Admissions with Different Weights on Factors: Evidence from a Japanese University
3. 学会等名 「人事配置の経済学」研究会（招待講演）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Yuki Onozuka
2. 発表標題 Trade-off of Students Between Exam-Based and Holistic Admissions
3. 学会等名 AASLE 2023 Conference (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 小野塚祐紀
2. 発表標題 Student Quality and Diversity: Changes of Admitted Students with the Introduction of Holistic Admission alongside Written-Exam-Based Admission
3. 学会等名 中央大学 企業研究所公開研究会（招待講演）
4. 発表年 2024年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

研究代表者個人HP https://sites.google.com/view/yukionozuka
--

6. 研究組織		
氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------